

残しておきたい「補足資料」

第3章に関連する「補足資料」

英語の基本構造について

1).英語の論理性を教え

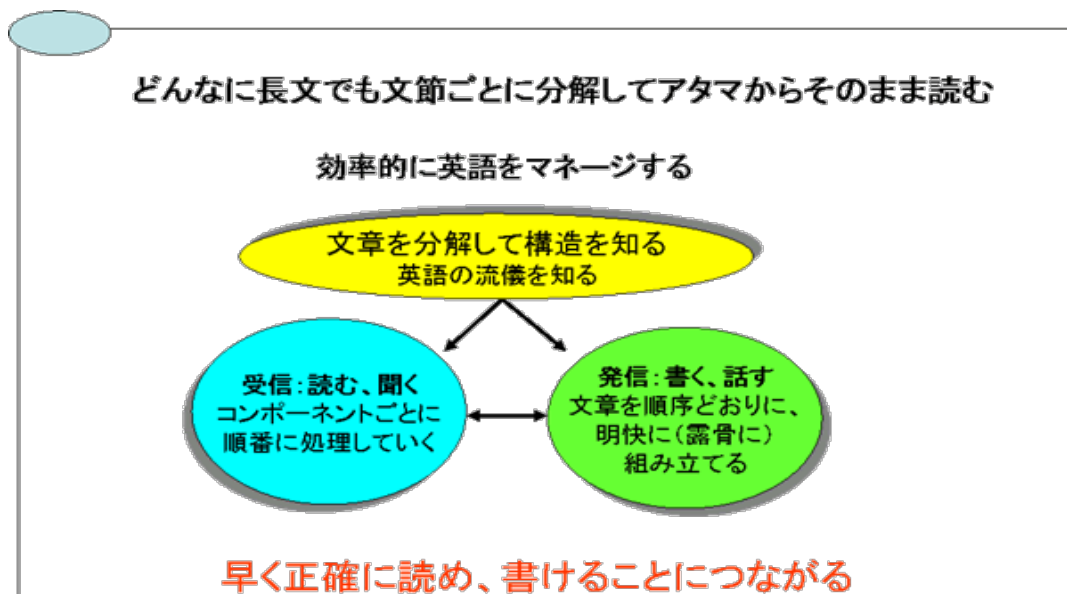
- ・英語は何故、そのような表現をするのか

2).英語思考を教える

- ・思考の順序が記述の順序に反映されることを認識し
- ・英語と日本語の記述(順序)の違いを徹底させ、
- ・英語の順序で内容进行处理(把握することに慣れる。

3).英語文書の展開法とその構造を教える

- ・一つの文章を構造的に眺め分解し、主と従たる部分を認識
- ・いつも Why,何かあったら Why,
- ・構成要素は図解で分析する



オープンで開かれた「文明日本語」の必要性

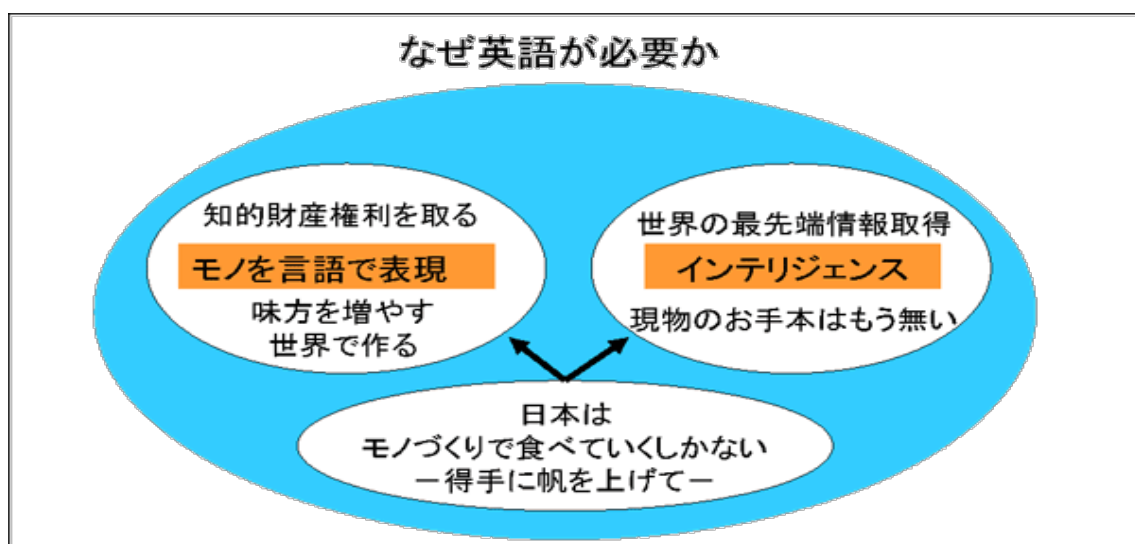
言語を基盤にして「物・事・考え」を表現するのが人間である。母国語以外の言語で「モノ」を考え、その結果を表現するということは、特に日本語のように、西欧言語とその処理手順が大きく異なる言語を母国語としている我々には、大変な難事業となる。

英語を修得する目的の一つは、自分自身と属する集団（会社など）のための「インテリジェンス力」の向上にある。日本語というバイアス（bias）が掛かった情報で海外の事柄や外国の人々の考えを理解したつもりになることは、大きな危険をもたらす。

グローバル社会でもとめられることは、先ず、世界と橋渡しができる、言語をもう一つ持つべきである。橋を渡り終えたら、今度は日本文化に根差した日本語が武器となる。

技術や社会システムなどは、世界共通の普遍性を持つ「文明」といえる。これらを英語で表現できなければ、世界に対して権利の主張できないし、説明責任も果たせない。

- (1) 英語学習には、「文化日本語」と論理的英語の溝を埋める橋が必要である
- (2) その橋はオープンな日本語、即ち「文明日本語」という存在である
- (3) オープンな日本語を構築していくには英語の構造を知ることが大いに役立つ
- (4) 英語で、どのように表現しているかを知ることが、
そのまま共通語としての英語で語られていることを理解できる力となる



世界の人々へ、誤解なく伝える為の論理力について

論理的思考の起点は、事実の把握を出発点とする。今生じていることは過去に生じた何らかの結果である。過去を知らずして状況把握は行えない。当然、分析も行えない。分析ができなければ問題点も出てこない。問題点が見つけれなければ、対策も考えられない。あるいは考える必要はない。

世界の人々へ、世界の共通分野での「物・事・考え」を伝えようとするなら、論理的に筋道つけて説明しないと、理解を得られない。「グローバル人材」を目指すなら、自分の説明に矛盾を生まない「論理的思考」を身につけ、自分のアタマで幾つかの答えを導き出せる「**創造力**」と「**思考力**」を鍛えることである。

さすれば物事の本質が見え、物事を多面的に捉えられ、受身での仕事でなく前向きな仕事がこなせるようになる。それらの資質が課題を発見する力となる。そして進むべき道筋を幾つか見つけることができる。後はアレコレと実行してみることである。口先人間で終わることなく、その「**行動力**」が周り人からの信頼を受けることに繋がる。

つまり「論理力」は、事実を矛盾なく明確に伝えることが目的である。文才は必要ない。要するに日本文化に根ざした叙情的で美しい、あるいは阿吽の呼吸を期待した以心伝心の「文化日本語」でなく、世界へ「物、事、考え」を伝える為の平明日本語、即ち「文明日本語」で書けば済むことである。

英語学習は世界を眺める為の道具として捉える

国連(United Nations)が発表する各種の報告書は、英語の他にフランス語、スペイン語、ロシア語、中国語などで読むことができる。いつかも書いたが、残念ながら日本語では得られない。日本語を母語とする人口は世界の2%ぐらいの少数派だから、仕方がない。

英語は論理的だから羨ましい、という人がいる。英語は論理的である代償に、日本語のような、自然と共に生きながらの情緒、感性を表現することは難しい言語である。天は二物を与えないのだ。

ということで、悲観する必要はない。つまり学校で教える英語は、**世界を眺める変わった道具**として扱うのがよいのではないかと思う。例えば「理科」は自然科学の分野であり、この分野は文化としての言語の影響を最も受けにくいところだから、いっそ理科を英語で学んでみてはどうだろう。

理科の英語なら、「未来完了形」は出てこないし、それどころかほとんどの文章は現在形だから文法の「時制」に悩まされることはない。英語を母語とする人が使う「熟語」などもでてこないから、アメリカ文化、イギリス文化を知らなくとも、まったく問題ない。

この60年の日本における小学校、中学校の教育でもっとも特徴的なことは、「作文」という学科が国語の教科の中でのみ取り扱われてきたことにある。日本語で文章を書くわけだから、それが国語教科の範囲に置かれるのは当然であろう。しかし作文すべき対象は、音楽から体育まで全教科に置かれるべきであろう。それら教科であれば物事を論理的に考え、論理的に表現する指導と訓練が行われやすい。さすれば、今日、日本でみられるような英語苦手の惨状は防げたであろう。

これからの世界は羅針盤のない混迷の様相を示すだろう。われわれ日本人は大きな方向を定める力量はないかもしれないが、目の前の課題に対処していくことには長けている。われわれ日本人は大きな方向を定める力量はないかも知れないがとりあえず目の前の課題に対処していくことには長けている。日本人は何らかの問題があれば改善する努力は惜しまない民族である。

第4章に関する「補足資料」

モノづくりの基本は「なぜ」を問う力(1)

言語表現の裏側にはモノづくりがあり、この二つは切り離せない。モノづくりを行っていると、そこではいつも何がしかの「問題」が生じる。問題の生じない完璧なモノづくりなんて言うのはありえない。そこで大事なものは、問題が生じたときに、いち早くその問題解決に取り組むことである。そんなことは、頭では誰でも理解している。しかし、「なぜ」を問う力が弱いと、この生じた問題への反応が遅くなる。**ひどい場合は、問題であることさえ気がつかない**。また気がついて、その問題の抱える重要度を量る判断力がない。

そのために何が起こるかといえば、問題解決へ向う行動が遅れることになる。「なぜ」を問う力が弱い人が多ければ、一つの問題が報告されても、直ちにアクションが取られることなく、“どうしましょう”なんてことになる。お互いに顔を見合わせながら「会議」しているうちに、問題の火は広がっていくことになる。ボヤの内に火を消す努力を怠り、火の手が広がってから消防ポンプ何十台をかき集めても、もはや手遅れとなる。

いまの状況が、よ〜く理解できる『書籍の紹介』

書籍名: 格差大国アメリカを追う、日本のゆくえ

著者: 中原 圭介 2015年4月30日 第1刷発行

発行所: 朝日新聞出版

第1章: 中間層が没落するアメリカ、

第2章: 格差は何故拡大したのか

第3章: 経済学は何のためにあるのか

第4章 中間層と国家の盛衰、

第5章: 21世紀のインフレ政策は間違っている、

第6章: 世界の模範となる日本

「モノづくり」の基本は「なぜ」を問う能力(2)

「なぜ」という疑問は幼児の時より芽生えて来るので、親がその問いにどれだけまともに対応するかで、その子の「なぜ」を問う力の発展にも大きく左右される。さらに、小学校から高等学校までの学校教育が、この「なぜ」を問う力の発展にも大きな影響を与えている。

日本の学校教育は、この大事な「なぜ」を問い、自分で答えを見つける力を育てるのではなく、なぜ、という疑問を押し殺して、何でもかんでも言われたとおり、指示されたとおり、教科書に書いてあるとおりに事柄を覚えこむことに重点が置かれてきたのではなかろうか。つまり、生徒・学生のレベルを、どれだけ頭の中にデータと情報を詰め込んだかで評価する仕組みになっていると思う。

その結果、学校での成績の良かった者は、それに反比例するが如く、この「なぜ」を問う力、つまり「**コト、モノの本質**」考える力が弱いということになる(失礼)。もちろん、そもそも「地頭」が優秀であり、学校の試験などたいして努力することもなく合格してきた一部の例外はあるが、必死に努力して良いお成績を重ねてきた人に、上で述べた事実が当てはまらないことを願う。一方で、「なぜ」を問う力が強い生徒・学生は、この押し付け丸暗記型、詰め込み型の教育に反発するから、結果として、大方は試験の成績が芳しくないまま卒業していくことになる。

しかし、これからの時代は、これまでのように答えが用意されているわけではない。答えは、自分の頭で考え考え抜いて、自分なりの答え見つけだすことが強いられるようになってきた。

いまの時代、課題を見つけ、その課題を解決する、この「なぜ、どうする」の思考プロセスを持つ人材が強く求められていると思う。それを持たない人は、いくら学校の成績が優秀であっても、これからの時代が求めるに合わない人材となる。

むしろ挫折をしてきた人間の方が様々な経験をしているぶん多様性があり、人を思いやる心があるので、人のつながりを大事にしながら夢が追える「モノづくり」の仕事は向いていると思う。そう言えば、1994年にダイヤモンド社さんから出版して頂いた、—小さな会社が生きる法—**身のほど経営のすすめ**に同じようなことを言っていた。

小さな会社が元気に生きる法

「身のほど」経営のすすめ

1994年 11 月 10 日 初版発行 発行所/ダイヤモンド社

『日々を働き惜しみしないで過ごすと確実に内面が変わってくる。そのうち立場も変われば、責任の度合いも変わってくる。自分が何かのお役に立っている、誰かが必要としてくれていると分かれば仕事は、お金のためばかりでないということも自然とわかってくる。最終的にはその人の人格までが変わってくる。品性まで備わってくる。実は仕事には我々をそういったところまで引っ張ってくれる可能性があるのに、むざむざと、その可能性を捨てている人がいる。實に勿体ないなあ、とおもう。うちの社員は、決していい学校は出ていない。大学を中退したもの、大学から入学を拒否されたもの、高校からは是非やめて欲しいと頼まれたもの、などなど教育ママゴンが目をもくような連中である。でも実際の世の中では、学歴以上に大事なことがたくさんある、

世の中で必要なものは数学とか、英語との知識ではなくて(無いよりはあったほうがよいいが、それが無いと始まらないというものではない)、人の気持ちが理解できるとか、誠意があるとか、正直だとかといった、人と人の関係に関わる単純なことが大事なのである。つまり、心が疲れていないこと、それが基本である。勉強のおくれは、社会に出てからすぐに取り戻せることができる。しかし社会に出てからの遅れは取り戻せない。

うちの連中は、どこかで挫折を経験している割には、心が疲れていないし、人の心の機微も結構わかる。もっとすごいのはお客に喜ばれると、一段と燃えることである。今まで自分の親にも期待されなかつただけに相手の反応が嬉しかったのだろう。いまや憧れのエリートたちが自分を頼ってくれたり、説得して商品を買ってもらったりすることで、働き甲斐をみいだしているようある。世の中の有名企業が自分達を必要としてくれていると感じられればいいのである、小さな会社であろうが、決して卑屈になることなく対等にやっていけるという自信が、連中のやる気を支えていると思う』。原文引用

余計なことだが一言、「黎明・成長期」における必要な人材は体力と根性のある人だった。「安定・成熟期」における必要な人材は、「ゴマスリ」と「忖度」と「こと無かれ主義」に徹する人であった。「衰退・変革期」における必要な人材は、自分で考え、自ら行動できる人材である。社員の値打ちも時代と共に変わる。「将来の利器」も、いまでは「自宅待機」に変わっている。